

第 69 回 近畿地区卒業設計コンクール応募作品一覧

平成27年4月8日
日本建築学会近畿支部

《 短大・高専・専修学校の部 》

No.	作 品 名	学生氏名	所 属	図面枚数
1	地域を繋ぐ空間～人の流れを創る集会所・高齢者の住む住宅ユニット～	野口 大介 山口 泰弘	中央工学校OSAKA 建築学科（夜間）	16
2	「現象」	岡山 博良	大阪工業技術専門学校 建築学科Ⅱ部	11
3	1/1000と1962の場所-平荘湖に沈む古墳と又平新田村-	縄田 諒	明石工業高等専門学校 建築学科	6
4	MZPARK	萬家 蘭	中央工学校OSAKA 建築CGデザイン科	5
5	アートが変える瀬戸内の暮らし ～多度津駅再開発計画	渡邊 詩織	京都建築大学校	7
6	みんなの美術館（地域交流の場となる施設）	中山 利彦	修成建設専門学校 建築学科	10
7	「WA kindergarten ～輪でつなぐ個性と協調性～」	国吉 真夕	武庫川女子大学 短期大学部 生活造形学科 インテリアコース	1
8	芸術を日常に	宮下 智子	京都建築専門学校 建築科二部	8
9	サンドイッチ=3と1	許 瑟芳	中央工学校OSAKA 住宅デザイン科	10
⑩	消えゆく十四の集落と 育ちゆく十四の思ひ出	渡邊 萌木	明石工業高等専門学校 建築学科	7
⑪	「音楽公園」 —音楽から建築を考える—	田中 美里	京都建築大学校	6
12	NEXPO	長鋪 愛沙	修成建設専門学校 空間デザイン学科	5
13	都市に生きる火葬 -京都・船岡-	奥村 賢人	京都建築専門学校 建築科	7
14	ワークの時空間	井上まい子	中央工学校OSAKA 建築CGデザイン科	6
⑮	街角文庫～思いを本にのせて	吉野 雄亮	大阪工業技術専門学校 建築設計学科	(A3) 9 (A4) 97
16	水至濁則有魚	越智 通信	京都建築専門学校 建築科二部	9
17	丘陵地での楽しい老後生活 ～千里山団地再生・高齢者住環境整備～	頼 愈尹	中央工学校OSAKA 住宅デザイン科	15
18	これからのバルの可能性 ～ウラロジ化=シビックプライド～	浪崎 千晴	大阪工業技術専門学校 建築設計学科	21
19	南晴台コートビレッジ 「ただいま」と「おかえり」の響きあう集合住宅群	中本 智子	修成建設専門学校 建築CGデザイン学科	13

(受付順) 以上19点<No. 欄に○印のものは入選作品>

《 工業高校建築科の部 》

No.	作 品 名	学生氏名	所 属	図面枚数
1	認定こども園と可能性 ～こんなところde保育～	嶋川 映司	大阪市立都島工業高等学校 建築科	5
②	森の保育園	高橋 俊光	大阪市立工芸高等学校 建築デザイン科	4
3	特別養護老人ホーム	中井 大成	奈良県立奈良朱雀高等学校	10
4	浮島の戦場 関空サーキット 大阪一のランドマーク	高田 雅也	大阪市立都島工業高等学校 建築科	6
⑤	Memory of the Goldenage	黒岩 法光	大阪市立工芸高等学校 建築デザイン科	4

(受付順) 以上5点<No. 欄に○印のものは入選作品>

日本建築学会近畿支部

平成26年度近畿地区短大・高専・専修学校並びに工業高校
卒業設計コンクール（第69回）審査報告

審査員長 川上比奈子

平成27年4月8日（水） 審査会場・大阪科学技術センター（6階600号室）

審査員長（互選） 川上比奈子

審査員 伊丹 康二・角田 暁治・田路 貴浩・中江 研・野村 正晴・山隈 直人
(50音順)

応募作品 短大・高専・専修学校の部19点、
工業高校の部5点 (別紙参照)

審査経過と審査講評

本審査を始めるにあたり、本コンクールの主旨と審査に関する内規、25年度の実績と本年度の応募状況を確認した。その後、互選により審査委員長の選定を行った。審査員7名のうち、1名は当日の都合により欠席であった。1名は事前の審査を行い、その結果を当日の記名投票の集計に加えることにより参加とし、計6名で審査した。まず、昨年度の審査方法を確認し、今年度の審査方法を審議した。その結果、昨年同様、各審査員が全作品を丁寧に閲覧した後、「短大・高専・専修学校の部」の全19作品から3作品、「工業高校の部」の全5作品の中から1作品を選んで投票し、その後、審査員が集まって合同審議することで、内規の3作品内まで入選作品を選出することで合意を得た。

投票の結果、「短大・高専・専修学校の部」では、No.10とNo.11が過半数を超える得票を集め、入選作品にふさわしいとして全員の賛同を得た。講評の詳細は各選評に譲るが、いずれも、テーマ設定、調査、分析、計画、表現の力がバランスよく優れていることが評価された。残る1作品については、得票数が過半数以下のNo.2、No.3、No.5、No.13、No.15、No.16について議論を行った。No.2は、水などの物質と光・影が織りなす美しくも見過ごされがちな瞬間、瞬間の現象を、熟考されたスケールで空間化しようとする概念的かつ詩的な提案である。ただ、実際の建築にどのように組み込まれるかの説明が不足しているため選外となった。No.13は、火葬場を観念的な側面からだけでなく都市が抱える現代的問題として取り上げ、素材と構造を現実的に提案するとともに未来の景観まで考えられた斬新な案であったが、部材バランスと造形に更なる工夫が欲しいとの意見が多かった。No.16は、一般に、大義名分を掲げるがあまり人間本性の理性的な面しか反映させようとしない都市やまちのつくられ方に真正面から対抗し、もう一つの半面、すなわち人間の欲動がもつエネルギーな可能性を地下空間に反映させる意欲作である。ともすれば泥臭く趣味的になりがちな表現を、洗練され抑制の効いたプレゼンテーションにまとめられていることが賛美されたが、地上との建築的關係が分かりづらいことが指摘され選外となった。No.3、No.5、No.15は、課題の発見と表現において、テーマは違えども拮抗した力が感じられ、審査員間で更に議論がかわされた。No.3は、湖に沈んで今は見ることも触れることも叶わない古墳群と周りの地形を縮小して再現し、その文化と自然を身体で体験できるように建築化したもので、着眼点と空間アイデアは大いに評価された。ただ、建築本体の提案が直方体になってしまった点が惜しまれた。No.5はアートイベントにより再興が進む地域の駅の建築エレメントに、海と風と光が創り出す鏡面効果を装置化して組み込む提案である。人々が列車を待つ間、コンコースに広がる海中のように幻想的な光空間や、波の上を歩いている気持ちになれる上階のプロムナード計画は、詩情そそる感性豊かな提案であったが、駅と周辺の関係への提案が更に欲しいとの意見が出された。No.15は、大阪福島区のパブリックスペースを対象に、本棚・本・各種イベントを工夫することによって、住民たちとともに実際にまちをつくっていくプロジェクトである。建築の卒業設計を対象とする本コンクールの枠組みが問い直される提案であるが、その実践力と今後の展開の可能性が評価され、入選作品として選出された。

「工業高校の部」では、投票の結果、No.2が満票に近い票を集め、入選作品としてふさわしいとして決定された。詳細は各選評に譲るが、森の力をかりて子どもたちに豊かな空間を提供しようとする計画、設計、表現のバランスの良さが評価された。No.5は、ミッドセンチュリーの自動車文化へのオ

マージュを建築化した提案で、懐古的な外観や平面計画に疑問も呈されたが、建築を構築する喜びが図面全体から滲み出ており、入選作品として選定された。

なお、数に限りがあることから上に挙げられなかったが、応募作品すべてに、建築やまちの可能性を切り拓こうとする提案が表現されていた。審査の最中、審査員全員の間で、学生・生徒と教育機関の忍耐強い取り組みに対し、敬意を払う感嘆の言がかわされたことを伝えたい。

「短大・高専・専修学校の部」の応募作品は、一昨年 13 作品、昨年 14 作品、今年度 19 作品と増加しており、「工業高校の部」は、一昨年 4 作品、昨年 7 作品、今年度 5 作品と推移している。テーマ設定を概観すると、保存・再生やまちづくりに関心が集まっており、在学中から近年の社会問題に真摯に向き合おうとする傾向がわかる。そうした社会性は歓迎されるべきものである一方、構築的な建築提案が極端に減少していることに、一抹の寂寥を禁じ得ないと、審査員全員が揃って感じたことも付記しておきたい。今後、本コンクールの対象や評価の観点を発展的に再検討するとともに、さらなる貢献の必要性が確認され、本審査を終えた。

(川上)

消えゆく十四の集落と 育ちゆく十四の思ひ出

渡邊 萌木君 (明石工業高等専門学校)

兵庫県篠山市大山地区への提案である。一見、過疎化する地方農村集落の活性化をうったえる提案かと思いきや、プレゼンを読み進めていくにつれ、そんな先入観をやさしく裏切ってくれるものであった。それは、「おだやかな集落の死に方提案」であった。十四の集落群が減築を繰り返し、規模を縮小させながら、一種のメモリアルホールへと変貌していくさまが、やわらかな表現によって描写されていた。昨今、過疎化の結果として廃村に追い込まれる集落も珍しくなく、また今後、防災の観点から集落が遺棄されることが避けられない局面もあるだろう。そんな差し迫る状況下であって、今回の提案は前向きでありながらきちんと現実に向かいあおうとする潔さと後味のよさを感じさせてくれたのである。マイナス方向の構築性ともいうべきだろうか。また、提案の着地をあえて最終的な死の姿を提示しないままフェードアウトしていくように表現がなされていたのも秀逸であり、胸をうった。

(野村)

「音楽公園」—音楽から建築を考える—

田中 美里君 (京都建築大学校)

本作品は、伏見桃山城キャッスルランド跡地を、耐震強度上の問題から立入禁止になっている伏見城の石垣を活用した屋外ホールなどを建設することで音楽公園として再生する計画である。設計の意図が図面上で的確に表現されており、目指す音楽公園像のイメージがフリーハンドによる図面から伝わってくる。その構成力や表現力は高く評価できる。一方で、現代音楽家でもあり建築家でもあるヤニス・クセナキスのデザイン技法を引用し、彼の楽曲「メタスタシス」をもとに計画しているが、伏見城とクセナキスの関係性はどのように考えればよいか、説明が欲しいところである。ここは先人の技法を発展させ、伏見城に固有のデザインモチーフを開拓して欲しかった。また、スコア譜をモチーフにしたリズム感のある「枠」を制作しているが、それが長方形に収まっている点や、直線を用いて曲線を創り出しているが、それがステージのコーナーに整然と収まっておりダイナミックさに欠ける点などは惜しまれる。いずれにしても、音楽を愛し、熱意をもって空間設計していることが伝わる優れた卒業設計作品である。今後の研鑽を期待したい。

(伊丹)

街角文庫～思いを本にのせて

吉野 雄亮君 (大阪工業技術専門学校)

昨年も議論となった卒業設計なのか、卒業制作なのかと意見の分かれる内容であった。学校の課題が大阪市福島区への具体的なパブリック空間の提案であり、学生が区長へのプレゼンテーションまで行った。その結果として区長より実施のオファーがあり、とあるお家の一部を街に開放している「サロン」の中に「街角文庫」としてオープンした。具体的に実施するプロセスを丁寧に記録し、プレゼンテーションすることを卒業制作としたものである。具体的に出来上がった物は一部屋の「図書室」と本棚である。しかし具現化するプロセスは充分に多くの障害が待ち受けていたようで、学生として最後まで完成をさせたことは大変評価できるものである。建築学科等が扱う領域はハードとしての建築から出来事、環境等その周辺へと今後ますます広がるであろう。吉野君の卒業制作は学校としての街への取組を含め、大変意義のあることと考え、所謂卒業設計ではないが充分賞に値すると考える。今後もこのような活動を続けていって欲しい。
(山隈)

森の保育園

高橋 俊光君 (大阪市立工芸高等学校)

本作品は、樹々に囲まれるように、ジェリービーンズやソラ豆の輪郭にも似た、やわらかな曲面で包まれた5つの建物が渡り廊下でむすばれた保育園である。住宅地内の緩やかな南斜面にあるこの建物は、内外各所でレベルを変えて、敷地形状になじませている。また木のルーバーで仕切られた半屋外空間が設けられ、子どもたちの生活空間に多様性をもたせるなど、こまやかな配慮がなされている。やわらかな筆致で丁寧に描かれたフリーハンドの図面がそうしたイメージを十二分に伝えてくれる秀作である。

「建物自体の輪郭をはっきりさせない」ために「壁面は有機的な曲面」で造形すると作者は説明しているのであるが、むしろその曲面は、この建物の存在を際立たせている。一方で、建物内部の間仕切壁は、直線の壁面やエッジをもった屈曲部が多用されている。また、その間仕切り壁が外壁に無造作に突き当てられ、連続する外壁曲面が本来もたらずであろうおおらかな雰囲気、内部では細かく断ち切られてしまっている。曲面を用いる意志が内部でも貫徹されていれば、より強固な作品性を持ち得たであろう点が惜しまれる。

(中江)

Memory of the Goldenage

黒岩 法光君 (大阪市立工芸高等学校)

建築のもつ“力”は、どこからくるのであろうか。

「Memory of the Goldenage」と題されたこの作品は、1950年代の旧き良きアメリカを象徴するゴールデン・エイジに着目し、その時代を牽引したといってもいい自動車のミュージアムを計画したものである。そのファサードは、当時のデザイン潮流を引用・投影した強烈なものである。現代において、このように直接的な方法を建築家が採用することは極めて希であろう。モノに対する設計者の思いやこだわりを表現するその在り様が、良くも悪くも抽象化されたかたちをとることが多い昨今、ドローイングや精緻なエンブレムのスケッチ等から作者の強いこだわりが感じられるとともに、それらが形態へとストレートに投影されたこの作品は、形態表現そのものが力を持つという、前時代的ではあるがしかし重要であろう一つの事実を思い出させてくれる。この様な設計手法が現代において持ち得る意味については、作者には今後の研鑽を通して答えを見つけてもらいたい。建築の設計としての完成度という点においてはいくつかの疑問が残るものの、図面からは何かを生み出そうとする人が時代を超えて持つべき心根や原点を、そしてひいては建築の持ち得る一つの“力”を感じさせる。我々をしてこの作品を評価させた所以である。

(角田)